

## 第54回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

生命と生命保険の関わり

岩手県 花巻市立西南中学校 二学年

高橋 百々葉

私は春に誕生日を迎え、十四歳になった。一歳下の妹も中学に入り、毎日充実した生活を送ることができている。

昨年、父の姉に子供が生まれ、とても小さくかわいい「いとこ」ができた。その子が産まれたときは安産だったと聞いた。出産時、そこまで陣痛がひどくなかったというのも耳にした。そのとき、私が産まれたときや、妹が産まれたときはどうだったんだろう、と聞いてみたくなった。

そんなとき、十四歳の誕生日を迎えた。

「私って、どんな風に産まれてきたの？」  
食卓を囲んでいる父と母に、少しためらいながらも聞いてみた。すると話を進めてくれたのは母だった。

「ももを産んだときは、急に帝王切開で産むのが決まって、全身麻酔をうってたから意識はなかったけど、初めてももを見たときとか、初めて抱っこしたときは本当に嬉しかったよ。」

帝王切開が急に決まったのは、産まれる前に破水したからだだったそう。帝王切開がとも嫌だった母は泣きくずれ、暴れないようにと全身麻酔をうたれたらしい。話を聞いていると、とても胸が苦しくなった。こんなに辛い思いをして産んでくれた、と考えると本当に母の存在は大きいなと改めて感じた。

私がぼーっと母の話に耳を傾けていると、ふいに母は立ち上がりタンスの方へ近寄った。何をしているんだろう、と母を目で追っていると小さな箱を二つ持って戻ってきた。それは、私と妹、それぞれの「へその緒」が入った箱だった。

「ももが産まれてきたときはね、へその緒が絡まって、へその緒を切るのが大変だったんだって。」

と、明るく母が話し始めた。他にも、妹を産むときも帝王切開だったという話や、私たちが小さかった頃の話を知っていた。

その中でふと、母が「保険」という言葉を口にしていった。帝王切開で産んだとき、保険の給付金を受け取った、という話だった。そのときは、祖母が母を生命保険に入れてくれていたらしく、それがなければ高額な医療費がかかっていたかもしれないと教わった。

出産前に破水し、急に帝王切開が決まったので、もしも祖母が母を保険に

## 第54回中学生作文コンクール

入れていなかったら、きっと高額な請求がきていたんだなと感じた。

私はまだ保険に入っていないが、

『もしも、このときこうだったら……。』と考えると、生命保険は必要なものなんだと改めて感じた。『まだ子供だから』『病気にはかからないから』と決めつけず、『もしも』のときに備えて保険に入ることが大切だなと気付かされた。

また、大変な思いをして私を産んでくれた母への感謝を忘れないで生活しようと感じた。私は将来、医療系の仕事について、生命保険とは違う形で健康面のサポートをしていきたい。きっと周りの人たちや両親に迷惑をかけてしまうのだろう。しかし、毎日支えてくれる人たちへの感謝の気持ちを忘れず、自分らしく恩返しをしていきたい。